白夜叉降誕

新月と彼岸花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白夜叉降誕

【Ｎコード】
Ｎ２４３４Ｉ

【作者名】
新月と彼岸花

【あらすじ】
ジャンプアニメツアー＋単行本＋捏造＋銀魂の最終回ってこんなんじゃね？
で構成されてます（多分

若干、「１」を読む前に「６」を読んだ方が、感じ的にいいかもしれないッス

感想くれたら泣いて喜びます！！

ブログやってるので、暇なら来てみて下さ?い
ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／１０１０１１１８

1

朝の１０時頃、真撰組頓所内
でもって近藤の部屋。

すたすたと廊下を歩き、
加えタバコをした土方が
ふすまを開けて、部屋に入ってきた。

土「近藤さん、今日の新聞しらないか？」

近藤「・・・・」

近藤は片手に携帯を握りしめたまま、ぴくりとも動かない

土方「ん？近藤さん？」

もう一度呼んでみると
涙目の近藤はゆっくり振り向いた

近藤「ぐすっ・・・・トシぃ・・・・・・・ぐすっ」」

土方「ちょ、ど、どうしたんすか」

近藤「・・・・ぐすっ・・・・・

・・・・・天導衆に呼び出しくらっちゃった」

「いっ・・・天導衆っ！？」

「総悟かなぁ、総悟がまたやらかしたのかなぁっ・・・・」

土方の顔が青ざめた

ドドドドドドド

部屋をとびだし、全力で廊下を走る

総悟の部屋へ勢いよく入る

土方「そおごくぅぅぅーん!?!?

ちょ、お前、今度は何してくれたんだよォォォ!!!」

「いきなり入ってきてなんでぃ土方、俺ぁ何も事件起こしてやせんぜぃ」

そう言いながら、

まだ真新しい新聞を処分しようとしている沖田。

土方「お前、何やって・・・・ん?」

ちらりと新聞の一面が見えた

活字で書いてあったのは

［真撰組またやった
井原屋半壊、従業員にも怪我］
という文字。

土方「いや、すでに事件起こしてくれてるんですけどォォォ！！」

2

幕府中央暗部、中央会議室

何？もある１２本のターミナルのようなものが、円形状に並んであり、
その上に天導衆の姿があった
そこからじっと近藤を見下ろしている

近藤「・・・・・・・・・・・・・。」

近藤（ちょ、痛い！！
痛いって！！
めっちゃ目からビーム出てるんですけど！！
めっちゃ視線刺さるんですけど！！
だいたいなんで室内で笠かぶってんの！！？
なんで服から目しか出てないの！！？
なんでそんなに俺を見つめるのよォォォ！！？

・・・・・あっ、やべ、
もうなんかウンコ行きたくなってきた・・・なってきたっていうか、
ケツからもう奴が顔出してきたんですけど！！！

まて、まて、落ち着け勲！！
もう三十路なんだ！！
もう立派な結婚前の男なんだ！！（お妙さんと）

これ位我慢でき・・・・・

ねぇのが俺なんだよォォォォ！！！！！！！！

それが脱糞キャラなんだよォォォォ！！！！！

よし、言おう！

トイレに行かせてもらえるよう頼もう！！

脱、脱糞キャラだァァァ！！）

近「あの～すいません

ちょっとトイレ行っていいすかね？

ちょっと朝から腹の調子が・・・・」

天「却下する」

近「へ？」

天「却下すると言ったのだ

お前のせいで
全然、白夜叉降誕の話が進まないのだよ。
やっとワシらが出てきたらと思ったら、勝手に一人でベラベラ回想しおって。

本物の白夜叉降誕はシリアスなんだから早くそっちの話にしたいのだよ

前フリが長い。」

近「・・・・・・・・・。」

（・・・・・・・ちょ、え？
あの、キャラ変わってるんですけどっ・・・！？）

天「高杉一派と桂一派が
紅桜という刀のために、戦闘した事件は覚えておるな？」

近（話勝手に進めてるぅぅ！！）

天「幕府としては、邪魔な攘夷志士を一掃したくてな、お前らの調査とは別にこちらでもその一件について調べたのだよ、そしたら面白いことがわかってな。

・・・ククク・・・・

白夜叉が生きているのだよ 」

近「し、白夜叉！？
あの攘夷戦争の時の武神がですか！？
噂じゃ、すでに死亡したって・・・・」
（あんたも人のこと無視して勝手にしゃべってるよォォォ！！！！！）

天「高杉一派に村田鉄矢という男がいてな、
調査しているとその男の日記が発見されてたのだ

「似蔵殿によると、とどめまでは刺せなかったが、
白夜叉といえどこの剣には勝てなかったようだ
もはや白夜叉といえど、この剣は止められないほどになった」

と書いてあったのだよ。

それに加え、春雨の報告によると紅桜を倒したのは
白髪の男だと言っている。

・・・ククク・・・

すべて調べあげよ

3

―同時刻、万事屋――――――

新八は、いつもなら
朝から万事屋へ出勤しに来るのだが、

今日はお妙が珍しく風邪をひいたので、その看病のために来るのが
遅れてしまった

とは言うものの、
一応は遅れることは万事屋へ電話をしていた

神楽ちゃんには
「パシリのくせに遅刻するとはどういうことアル！！」
と、怒られたけど。

新八はガラガラと玄関の戸を開けた

新「こんにちはー
遅れてすいませーん」

と言って、奥へと入って行く

まぁ、当たり前といっちゃ、当たり前なのだが、

真昼なのに

ソファーの上で、銀さんはジャンプを顔に乗せて寝ていた。

神楽ちゃんのいる様子がなかったけれど、
定春もいないところをみると、どうやら定春と散歩のようだ。

新「銀さーん、起きて下さいよ銀ーさん」

起こしてみたが
全く反応なし

新八は呆れて、大きなため息をついた

顔のジャンプをとって
叫んでやろうと思い、

勢いよくジャンプを取った

新「銀さっ・・・・・!!

・・・・??・・・・」

ジャンプで銀さんの表情が見えてなかったせいでか
気づかなかったが、

どうやら、うなされているようだった

新八（お登勢さんに家賃を
迫られてる夢でもみてるのかな

こんな昼間に寝てるから
働けって言われてんだよ）

「銀さん、大丈夫ですか、
銀さん」

今度は体を揺すりながら起こしてみる

すると突然、

銀時は跳び起きた

冷や汗を垂らしながら、大きく目を見開いて。

新「ちょっと、大丈夫ですか銀さん。」

銀時は新八の問い掛けに

生返事を返し、

銀髪をボリボリかきながらゆっくりと歩き出す

新「ちょっと、いきなり
どこに行くんですか？」

銀「ん～、
ジャンプ買いに行って来るわ」

そう言いながら玄関の戸を開ける

何か変な感じがした

新「銀さん！！」

銀「あ？」

新「・・・・・なんでもないです」

銀「そうか」

それだけ言って
銀さんは出掛けて行った

新八が感じた違和感は、

銀時がジャンプを買いに行くと言ったことだった。

昨日すでに今週号は
買っており、

さっきまで

ジャンプを顔に乗せて寝ていた

と、いうこと

だが、新八は気づかなかった。

気づけなかった。

―――――――

4

新八は、スナックお登勢に向かおうと、万事屋の階段を下りていた

罪悪感はあった

本人には何も言わないで、
勝手に聞くのだ。

知られたくなかったから、今まで言わなかった可能性だってある

それでも、一度湧いてきた野次馬心のようなものを、
新八は止めることはできなかった

止まることなく
階段を下りていく

すると、神楽ちゃんと定春が向こうから歩いて来た

散歩から帰って来たようだ

「あっシスコン眼鏡アル。
姐御の調子はどうアルカ？」

新「だいぶよくなりましたよ豚インフルエンザでもなかったですし。
」

神「そうアルカ。
よかったア・・・・

突然、

神楽の声を遮るほどの声が、
スナックお登勢に響いた

お登勢「いい加減にしてちょうだい！！もう帰っておくれ
何度聞いても同じことだよ！！」

新八と神楽は驚いて顔を見合わせている

外にいる人にまで聞こえるほどの大きさだ

びっくりしたのも仕方ない

そしたら、

少しの時間もしないうちにスナックお登勢から
隊服姿の人が一人出て来た

山崎だ

向こうはこちらに気づいた様子だったが、
なぜか目を合わせようとしないで、立ち去ろうとしていた

新「え、山崎さん？
どうしてこんな所に？」

山崎は答えなかった。

そして、目を合わせないまま、その場を足速に立ち去った。

その時の山崎の目は、

動揺で揺らいでいた。

新八は、思わずスナックお登勢へ走り出していた

そして、戸を勢いよく開け
叫んだ

新「お登勢さん！！！！！！？」

急に入って来た新八に
お登勢は驚いたようだったが、
すぐに暗い顔になり、

静かに言った。

お「新八かい・・・・大変なことになっちまったよ」

後からすぐに神楽と定春も入って来た。

―――――――――

真撰組頓所

土方自室

山「副長」

土「山崎か。入れ」

ゆっくりふすまを開けて
山崎が入ってきた

山「・・・・ 失礼します」

山「・・・・・・・・」

山崎は下を向いたまま、
なかなか口を開けずにいた。

土「・・・そうか」

山「ちょ、えっ！？
まだ何にも言ってな・・」

土「バカか、お前は
そんな顔で言いにくそうにしてたら
誰でもわかるだろーが。

土方はタバコをつけ、
ハーと煙りをはき、

言った

「万事屋は黒なんだな？」

山「・・・・・はい」

「わかった。

報告書貸せ。

夜の隊長会議、俺が読む」

山「土方さん！！！」

土「お前は下がってろ」

山「・・・・・・はい

・・・失礼しました」

そう言って山崎は
土方の部屋から出て行った

――――――――――――

―スナックお登勢――――

お「白夜叉って知ってるかい？」

神「銀ちゃんのことアルか？」

お「なんだい、知ってたのかい」

新「はい、前に桂さんから聞いたことがあります」

お「なら、話が早いね

銀時が白夜叉だってことが真撰組にばれちまってる

このままじゃ銀時は切腹だよ」

新・神「えっ・・・・」

わけがわからない

短期間にいろんなことが
起こりすぎている

新「ちょ、待って下さい！！

切腹？

なんでそんなことを！？」

お「・・・・ 奴が白夜叉だからだよ・・

そりゃあ、昔攘夷志士だった奴らなんか腐るほどいる

そいつらまでいちいち粛正してたらきりがないしね

・・・・・・それに・・・・

戦争中は人を殺しても罪にはならないからね・・・・・・

だけど、

今の幕府のてっぺんは天導衆なんだよ

奴が攘夷戦争に参加してた時に、天導衆の中でも一番のお偉いさんと奴が戦って、そいつは瀕死の重傷をえたらしくてね、その時の恨みをはらそうとでもしてるんだろうさ。

字〔あざな〕は黒夜叉って言うらしいんだけど、まったく、誰がそんな名をつけたんだか・・・。」

神「ちょっと待つネ！！

銀ちゃんはほとんど木刀しか使わないネ

そんな、人を殺すだけの戦争なんかに参加するはずがないアル！！」

お「こうなった以上は
話した方がいいのかもしれないね・・・」

5

真撰組、隊長会議――

土「近藤さん、もう始めていいか？」

沈黙の口火を切ったのは土方だった

まだ会議までは時間はあるというのに、
その場にはすでに隊長ら全員が集まっていた。

事の重大さを感じとってのことなのだろう

土方の質問に近藤は少し考えたようだったが、
普段とは考えられないような真剣な顔で

「わかった」

と、答えた。

それと同時に土方は懐から報告書を出す

「前々から山崎に白夜叉について調べてもらっていたことは知っていると思う。

調べた結果、白夜叉は長州の萩出身だということがわかった。
本名を探るために萩にも行ってもらったのだが、

白夜叉について、いろいろわかった。

まず、ガキの頃についてだが・・・・」

［スナックお登勢］

お「銀時が、まだ年少の時・・・・

２０年前、萩

松「屍を喰らう鬼ですか？」

浪人「あぁ、そうだ。

なんでも、攘夷戦争で死んじまった奴らの荷ぐるみを剥いでまわってるらしい。
今の世の中、そんなに珍しいことじゃないが、
その身なりが恐ろしいそうだ。

まるで天人のような真っ白い髪、
鬼のように冷たい、赤い眼差し。

まるで
地獄で死体荒らしをしている冷酷な鬼のようだそうだ。」

松「天人ではないのですか？」

浪人「天人なんかじゃねぇ
れっきとした人だ。

悪いこたぁ言わねぇ

兄ちゃん

あの場所へは行かねぇ方がいい」

松「ハハ、そのようなことを言われると余計に見てみたくなりましたね

松陽は丁寧にお辞儀をした後、戦場だった所へ歩き出そうとした

浪人「オイっ!!兄ちゃん!!」

慌てて浪人は引き止めようとした。

だが、

松「教えていただき、
ありがとうございます」

そう言いながら、きれいに微笑み返されたので
浪人はそれ以上何も言えなかった。

―――――――――――

6

―――――――

何千という死体

血と人の肉が腐った臭い

その空には何百ものカラスが飛んでいた

その目的はひとつ。
攘夷戦争で死んだ人間の肉を啄むのだ

そこは

普通ならたまらず、
その場を離れたくなる
地獄のような場所だった

だが、そこに一人
銀髪の少年は立っていた

ボロボロの着物を着、
その小さな体で刀を抱えている。

銀「・・・・・

どこも同じだな、

死んでるのはほとんど地球人じゃねーか。

・・・・馬鹿な奴ら。」

横たわる死体を見て呟いた

そしていつものように

死体を荒らし始める

空ではカラスが増え始めた

空が赤く染まっていく

そのせいでか、
昇りかけの月も赤かった

銀「ちっ、

金目の物がありゃしねぇ。

おおっ！？」

若い侍の懐を探っていたときに、

丁寧に竹ノ子の葉で包まれたおにぎりが出てきた

銀「おにぎり発見！！」

ヒラリ

それを取った時、一枚の紙が落ちた

銀「んん？」

それは写真だった

そこには、目の前の侍と
女の人が写っていた。

そしてその間に写っているのは自分と同じくらいの歳の男の子。

笑っていた

銀髪の少年の脳裏に
いつかの記憶が蘇った

―――――――――――

銀「父上！？
母上！？」

少年は叫んでいた

何も無くなった家の中で。

いや、ひとつだけあった

今さっきまで
自分が寝ていた布団が。

しかし、それ以外何もなかった

食料も、家具も、

両親も。

銀「・・・・・・

フン」

（幸せそうな顔しやがって）

だが、心に湧いてきた気持ちとは逆に
銀髪の少年はそっと、

写真を侍の懐に戻した

そしてその上に座って
おにぎりを食べ始める

銀「・・・・・・・・・

うめぇ」

その時俺は、
男が近づいてきたことに
気づかなかった

にぎり飯を食べながら、
あの日のことを思い出していたせいなのかもしれない。

そしてその男は
いつの間にか俺に近づき、

そっと、俺の頭に手をのせ

こう言った

松「屍を喰らう鬼が出るときいて来てみれば・・・

君がそう？」

すべてはこの時代（とき）より始まった

移転しました（>＿<）

移転しました

http://ameblo.jp/10101118

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2434i/

白夜叉降誕

2010年10月9日07時29分発行